【エッセイ】
虫たち

＜心斎橋大学　処女提出エッセイ＞

前川　美和

孫と散歩をしたり、主人とウォーキングしたりしていると、色々な虫たちに出会う。里山と溜め池に挟まれた坂道を通ると、どこからともなく下りてきたシャクトリ虫に驚かされることもしょっちゅうだし、例の独特の匂いを辿るとツル科植物に亀虫が群れているのを発見することもある。五月の初めには公園の草の穂に幼虫も含め何匹ものテントウ虫が留まっていた。英語では「レディ・バグ」つまり「淑女虫」と名付けられているが、なかなか食欲旺盛で天敵とするアブラ虫にとっては獰猛なプレデターといったところだ。三匹ほど家に持ち帰り、アブラ虫に占領されつつあるハイビスカスの枝に放ち少々お仕事をしてもらった。

そして最近はやたらに毛虫を見かける。池の縁に植えられた桜の木は、花見時にはみんなの目を楽しませてくれるが、今の時期になるとそばを通るときに気を付けないと、毛虫が降ってくる。黄色と柿色と黒のストライプの派手なやつが葉や幹にくっついているのだが、体を振動させながら道を横断していることもある。公園の低木にも鮮やかな毛虫が棲んでいるが、こちらの顔はオレンジ色の丸顔で八の字の目のような模様があって愛嬌がある。

ただ、不思議なことにこんなにとくさんの虫を見かけるのに彼らの成虫の姿がどんな姿なのか、いまだにさだかではない。アゲハやキアゲハの幼虫と成虫は、はっきりと認識しているのにである。毛虫だってサナギになり羽化しているはずだが、彼らの晴れの姿を知らないのは、わたし自身の関心の薄さに原因があるのだろう。わたしの中では、毛虫イコール蛾という法則があって、蛾に対しては蝶ほど愛着を感じない。蝶と蛾の違いさえはっきり分かっていないのに、外見とイメージだけで無意識に分けて選んでいるのだろう。そして、この傾向は蝶と蛾だけでなく自分にかかわるすべての物事に対してなされる選択に通じる。中途半端な知識と外見イメージにとらわれることによって、視野を広げる扉を閉ざしたり、事実を知る機会を失ったりしていることが案外多いのかもしれない。

〈　了　〉